

9月23日(水)実施

ペットがいると人生は面白い！～映画「先生と迷い猫」上映会 & パネルディスカッション～

司会:

越村義雄氏(一般社団法人 人とペットの幸せ創造協会・会長、一般社団法人ペットフード協会・名誉会長)

パネリスト:

太田光明氏(東京農業大学、動物介在療法学研究室教授)

柴内裕子氏(獣医師、赤坂動物病院・総院長)

山崎薫氏(学校法人ヤマザキ学園 ヤマザキ学園大学・ヤマザキ動物専門学校、理事長・学長)

於保実佐子氏(一般社団法人ふくしまプロジェクト・代表理事)

越村:

本日はお忙しい中、またお休みの中、このように多数の皆さまにお越し頂きまして、ありがとうございます。

本日司会を務めさせて頂きます、一般社団法人 人とペットの幸せ創造協会会長、並びに、一般社団法人ペットフード協会の名誉会長を仰せつかっております越村でございます。よろしくお願いいたします。

まず最初に各先生から自己紹介を頂きたいと思えます。

柴内:

皆さまこんにちは。ようこそおいでくださいました。

私は、日本最古といいますが、一番最初の女性の動物のお医者さんです。長い間、動物たちの診療を通して、患者さまとお付き合いしてきました。私が獣医師になった理由は、どなたもご存じないと思いますが、第2次世界大戦頃、私は10歳で、東京代々木の自宅にたくさんの動物たちと暮らしていました。日本中にいる獣医師は当時男性だけで、みんな軍馬の先生として出兵し、日本にはいませんでした。ですから私たちと暮らしていた動物たち、祖母が大事にしていた犬や小鳥や猫もみんな、人と同じように、誰の手当も受けられずに亡くなっていきました。私は戦争に行かずに動物たちのお世話ができる動物のお医者さんになりたいと思いました。それが10歳の頃です。それから今日までずっと、動物たちと一緒に過ごしてきました。そして、とても健康で幸せです。そういった意味で、動物たちの治療をするだけでなく、動物たちが人の社会の中でどんなに大切かということを知っていただくために、30年前に、日本動物病院協会の責任者として「人と動物のふれあい活動」をスタートさせました。全国の素晴らしい飼い主さんと動物たちがご協力くださり、また、企業として、今日司会をしてくださっている越村さんにもずっと、私たちの活動をご支援いただいています。何十万人の方とお付き合いしているのに、一度の事故も、アレルギーも起こさないのが、私達の経験です。そのことを伝え続けて、これからも健康なうちは、努力していきたいと思っております。今日はよろしくお願いいたします。

越村:

どうもありがとうございます。今日は先生のいろんな話を拝聴できればと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

それでは、太田光明先生、よろしくお願いいたします。

太田:

こんにちは、太田です。私は20年間、動物の生理学を研究していて、今から16年前に「人と動物の関係学」というものを日本で立ち上げるために麻布大学で研究を始めました。その麻布大学は今年の3月に定年で辞め、現在は東京農業大学にいます。今まで約40年間ずっと動物と触れ合ってきて、動物の良さを教えてきましたし、自分自身でも感じてきました。その中で現在は、動物は人の健康に大変良いということを証明する研究を相当真面目にやっています。僕が麻布大学に所属した当初は、「動物は人の健康にいい、ということはあたりまえだ」というように、学問の領域からは若干外れていたんですが、この16年間真面目にそ

の研究をしたことで、学問として、動物は人の健康に大変有益な働きをしているということを明らかにしてきました。特に最近では高齢者にとって動物がいいということ、今日も映画の中で、校長先生がいい形で猫と暮らし、影響を受けてきたということを見たわけですが、そういったことを実際に科学のレベルで明らかにしようと今も、今後とも頑張っていきますのでよろしくお願いいたします。

越村:

ありがとうございます。後ほど太田先生には、幸せホルモンと呼ばれるオキシトシンの研究でも第一人者でいらっしゃるの、そういったお話もお伺いできればと思っております。

続きまして、山崎薫先生、よろしくお願い致します。

山崎:

こんにちは、山崎です。私は学校法人ヤマザキ学園の理事長をしており、ヤマザキ学園大学とヤマザキ動物専門学校を営んでいます。現在は、日本で唯一の「動物看護学部」があるヤマザキ学園大学の学長も務めております。本学園は私の父が50年前に自宅の応接間でたった5人の生徒でスタートさせたのが始まりです。動物の看護・ケア・グルーミング・トレーニング等を勉強する専修学校でしたが、2004年に短期大学を開学し、2010年には4年制大学を開学しました。動物の看護師としての知識・技術をもってグルーミングサロンを開業したり、ペットショップで働いたり、今は動物の保険会社やペットフードの会社等に就職する卒業生もたくさんいます。こうした卒業生が一人を超え、日本中で活躍しています。実は柴内先生には大学で授業をしていただいたり、太田先生は私が「人と動物の関係学」の博士号を取る際にご指導いただいた教授でいらっしゃいます。いま私は本学で、動物人間関係学概論や、アニマルアシステッドセラピー論、イヌの特性論などの授業を担当しています。また環境省の動物愛護部会の委員をして法律の改正にも携わってきました。日本動物愛護協会の理事や、日本動物福祉協会の理事を務め新東京支部として、迷子になったり、捨てられてしまったイヌやネコを預かり、新しい家族を探す活動をしています。

今日、みなさんは映画をご覧になって、ほのぼのとしたような気持ち、あるいはいろんなことを考えさせられるような思いでここにいらっしゃるかと思います。こういう映画をたくさんの方に観ていただいて、わんちゃんのこと、猫ちゃんのことを皆で考えていけたらいいなと思っています。私は、人間は人間だけでは生きていけないと思っています。建学の精神である「生命への畏敬」と「職業人としての自立」をテーマに開学し、「生命を生きる」という教育理念のもとで、学生は毎日勉強しています。人間は人間だけでなく、虫がいたり、木が生えていたり、そこに小鳥がさえずったり、猫がいたり、犬がいたり、そんなふうにも命の多様性の中で初めて人間は幸せに生きられるし、それが当たり前のことなんだと思いながら今日は参加させていただきます。

越村:

ありがとうございます。今先生がおっしゃった、人間は人間だけでは生きていけない、とは私共にとっては大変素晴らしい言葉かなと思っております。また後ほど、どうしてそのようにお感じになったか、ということもお聞きしていきたいなと思います。

続きまして、於保先生お願い致します。

於保:

皆さまこんにちは、はじめまして。一般社団法人ふくしまプロジェクトの於保実佐子と申します。よろしくお願いいたします。

ふくしまプロジェクトという、福島の人、というふうに思われるかと思いますが、私は東京生まれ東京育ちで3年前に福島に引っ越しました。それまでは大学を卒業してからずっと出版の仕事をしておりまして、10年位前にペット関係の情報誌の編集長を拝命したことをきっかけに動物の世界に入りました。動物愛護法の改正ですとか、動物愛護の日本の色々な問題取材して歩くうちに、いろんな先生方ともお知り合いになるようになりました。地震が起こって福島に取材に通って行くようになったとき、そこで色々な動物愛護の問題を見聞きするうちに、もう少し福島でなにかをしたいなと思って3年前に福島に引っ越した次第です。そして2年前に一般社団法人ふくしまプロジェクトを立ち上げて、今は猪苗代湖のある猪苗代町に、ちいさなシェルターとセミナールームや事務所を構え、そこで活動を行っています。ただ一般社団法人で動物の保護をする団体となると、一般的には寄付を頂いて活動を行うことが多いんですが、私どもはたくさんのお仕事をいろんなパートナーの方とさせていただいて、その事業収益

を動物保護の一部にすることで運営をしています。スタッフも現在9名おりますが、有償でお給料を払っているのでこれがなかなか大変ですが、やりがいを持ってやっています。今回の映画にもありましたように、今後動物に関わる様々な問題を解決していくにあたり、殺処分されている動物たちの数を少なくしていくということと、飼いたいと思っているけれども飼えない方々、特に高齢の方々がどういうふうにしたら動物を飼えるようになるかというのが、今後大きなテーマになっていくと思うので、そんなことを考えながら今回の映画も拝見しました。そういうことをテーマに、ここにいらっしゃいます偉大な諸先輩方の遙か遙か後ろの方を、頑張っけて付いて行きたいと思っているところです。どうぞよろしくお願いいたします。

越村:

ありがとうございます。殺処分という話が出ましたが、昔は120万頭ぐらい殺処分されていましたが、今は12万8千頭ということでだいぶ減ってきています。アメリカでは250万頭から300万頭殺処分されているという話があります。全体の頭数に対して、殺処分の割合は、日本はアメリカより優れており、日本では殺処分の数は激減しているといっても過言ではないと思います。しかし、まだまだ、できることがあるということだと思えます。

それでは、会場にいらっしゃる皆さまも、今日「先生と迷い猫」をご覧になってどんな感想をお持ちかな、と思うんですが、専門家の先生方にどのような感想をお持ちかお聞きしていきたいなと思えます。

柴内先生はこの映画をご覧になって、どんな感想をお持ちでしょうか。

柴内:

それぞれにご自分の立場などもあるので感じ方は違っているとは思いますが、私はこの映画をたくさんの方にご覧頂いて、自分のなかにあるものを見つけて頂けたらいいな、と思いました。猫がどんな行動をし、猫と人間の愛情がどんな形でいたら一番お互いに無理がないのか、と。そして猫との関係性の中で起こる様々な場面で、自分が持っている意外なものが出てくるんですね。校長先生がもう少し早く猫ちゃんとの心を通わせていたら、きっと校長先生という立場でも、教育の幅がより広がっていった可能性もあるのでは、と思えますし、それからまた、外にいる猫たちに対する一般の人たちの考え方も変わっていると思えます。皆さんお感じになったと思えますが、最後、あの子(ミイ)はどこにいるのかな、と思ったと思えます。どこかわからないところが良いんだと思えます。私たち人類は長い歴史の中で、犬や猫という動物たちから、飼い主なしに生きるという選択肢を失わせたんですね。今、犬や猫を自然に戻そうということは、あり得ないことです。それほど長い間私達は犬や猫のお世話になり、可愛がり、愛し、そしてたくさんの役割を果たしてもらっているながら、犬や猫はこうしてはいけないとか、例えば、同行避難がいけないと言われたりします。もう人間の社会でしか生きていけない動物にしておきながら、一緒に避難もできないだとか、どこかの会場に入っけてはいけないだとか、そういう問題が起こるのは、私たち飼い主が、犬や猫を理解して、どなたにも愛される動物に育てていないからだと思えます。動物の好きな方もそうでない方も、いろんな立場でこの映画を見ると思えますので、その中で、動物との関係において、新しい自分をして頂きたいと思えます。これくらいでよろしいでしょうか。

越村:

ありがとうございます。今柴内先生が、もっと早く、校長先生が猫ちゃんと心を通わせていたら、また先生も本当に幸せな人生をより長く共有できたのではとおっしゃっていましたが、まさに私は、日本の小学校、中学校、高校、大学の先生方も、動物を愛する先生が多くなればもっと、心優しい、また思いやりのある学生を排出できるのではないのかな、感じました。

太田先生はこの映画について、どのような感想をお持ちでしょうか。

太田:

最後の方に亡くなった奥さんが、「猫がきらいだなんて、人生の楽しみの一つを知らないってことよね」と言っていました、その通りだと感じました。動物の良さというのは、接してみれば初めてわかるので、鼻から嫌いだ、というのは相当大きな損をしている。また、僕は、長い間動物の生理学と行動学をやっていますが、猫は追いかけると必ず逃げてしまうので、校長先生が一生懸命追いかけていましたが、あの形だと絶対に見つかりません。(笑)そういう意味では非常によく描かれているなあ、と思いましたし、動物の生態もよく理解できるので、大変良い映画だと思いました。私も研究室で猫を飼っているんですけど、たかだか20~30

平米の決して広くはない部屋でもいなくなって、すると学生さんたちが、「猫がどこかに行ってしまった」と言って一生懸命探すんですけど、探せば探すほど見つからないんですね。上手に隠れてしまうのでなかなか見つからない。そういう意味でも、猫の生態をととても巧みに表わしているなあと感心して見ていました。

越村：

ありがとうございました。私も猫を 2 頭、家で飼っておりますが、やはり太田先生が言われるように、いなくなって探すと逃げて寄ってこない、というのは日常茶飯事です。またそこが猫の魅力でもあるのかな、と思っております。

山崎先生はどのようにお感じでしょうか？

山崎：

猫も犬も追いかけると逃げますし、恋人も追いかけると逃げます。(笑)この映画の中で、私が一番心に残っているのは、ここに来てきたドロップちゃん(ネコ)がとても自然で、無理な演技をさせられていないこと。それからネコが好きな人たちが作っているんだな、というそんな印象を一番に受けました。先ほどお話したように私はいろんな仕事に携わっておりまして、環境省では、「無責任な飼い主ゼロを目指そう」というのをスローガンに掲げて、「ネコは室内で飼いましょう、外は危険がいっぱい」ということを伝えています。この映画の中でも、ネコが傷つけられたり、交通事故や迷子の危険性、地域猫の繁殖、近所からの苦情、猫同士の喧嘩など、色々な問題が描かれています。ネコは室内で飼うのがいいと思っています。ネコが安全に暮らせますし、高齢者の方も飼いやすいと思います。ただし、この映画にも出てくる「地域猫」に心あたまるもの、それが自然なのではないかな、とも感じます。ペットは室内で飼うこと、それも大事だとは思いますが、その時代に合った、あるいは、都会とどこかの島や田舎とは飼い方や動物との接し方、考え方が違うと思うんですね。1680 年代に徳川綱吉が「生類憐れみの令」を出しましたが、あの法令は一つではなく、200 個くらい細かいことを指定しているんです。その細かい 200 を見ていくと、とても良いことを言っているんですね。たとえば、野良イヌを 10 万頭収容するために、現在の中野駅のそばに、東京ドーム 21 個分ほどの広さの囲い場を作ったそうです。ですけども、もし、イヌを殺したら人間まで処刑されてしまう、ということになると、人と動物の関係も「イヌやネコになんて関わらず、知らん振りしていたほうがいい」というように関係性が変わり、良い関係を築くことはできなくなってしまいますよね。江戸時代は、ネコは家の中で飼われていたけれども、イヌは地域犬だったわけです。飼い主がいなかった子の方が多い。ドロップみたいに「ミイ」だとか「たまご」だとか、いろんな名前をもらって、いろんなところに顔を出しながら、とても楽しく平和に生きていける、そんな社会ってやっぱり素敵だな～、と思いました。この映画からはいろんなことを教えてもらえるんだな、と、そんなことを感じました。これはいけないとか、これはいいとか、これを法律にするとかっていうのは、その場所や地域や文化を考えながらやっていけないといけないんだということを、考えさせられた映画でした。

越村：

ありがとうございます。とても示唆に富んだ山崎先生のお言葉でありまして、恋人は追いかけてはいけないということでしたが、私なんかは追いかけないと、誰も恋人になってくれないのかな、なんて思ったんですけども。(笑)また綱吉のお話もありましたが、たしかに日本は「生類憐れみの令」で動物愛護管理法という意味では、世界で初めてそういった法整備をした国だったわけですが、その後のフォローが、残念ながら日本ではできていなかった、ということです。「小さなペットでも殺せば打首」という大変厳しい規則を綱吉が作ったわけですが、現代ではもちろん、当時より良い動物愛護管理法ができております。ですがまだまだ日本でも整備していかなければならない部分が見受けられるかなと思っております。

於保先生はどんな感想を抱かれましたでしょうか？

於保：

今、先生方がおっしゃったように、この映画は本当に様々なことを考えさせてくれる映画だな、と思って拝見しました。例えば高齢者の問題で言えば、奥様に先立たれて一人寂しく暮らしている先生が黙々と翻訳をしているような様子を見ると、一人暮らしになってしまった男性の老後の寂しさみたいなものを、ひしひしと感じました。あとはその寂しさとともに、生活に対するハリの無さみたいなものがこんなに切ないものになるのかと、よく表現されているなと感じました。それから、のびのびとその地域で暮らしてい

る地域猫の素晴らしさ、と同時に、いつ事故に遭うか、いつ帰ってなくなるかわからないという危うさもつくづくと考えさせられました。そして子供の問題も描かれていて、少し生きにくさを感じている男の子がカッターを振り回したりしていましたが、ああいうふう生きることに少し悩んでしまっている小さな子どもですとか、また、いじめにあって学校に行くのがつらい女の子がいましたね。バスから降りてくるとベンチのところで猫に出会って、いろいろ話をして家に帰っていく、そういった触れ合いが本当に素晴らしいな、と思って、子どもたちのことも、この映画では語っているのだなと思ひながら拝見しました。様々な人と動物が関わっていくことの素晴らしさと、関わっていくためにはどうしたらよいかということを一一人ひとりが、きちんと自分に置き換えて、自分だったらどうできるか、とか、自分だったらどうしていきたいか、ということを考えるヒントがたくさん詰まっている素敵な映画だな、と思いました。

越村:

ありがとうございました。

本当にそれぞれ自分自身にとって置き換えて考えるということは、大変重要な、と思います。

つい先日日本経済新聞で京都国立博物館の館長の佐々木様が「わたしとムク」というご自身の体験を文化欄で語っておられましたが、まさに今回の映画と非常に似ている部分がありました。最後にやはり「ムク」がいなくなってしまうんですが、その後もずっと探し続ける、というお話でした。それだけ動物が飼い主にとって、暮らしている方にとって、いかに大切かという心温まるメッセージが含まれておりました。今回の映画も、そういう意味でも我々の生活にとって、動物がかけがえのない存在で、人間同士の絆を結ぶ存在でもあるということも表現されていたかな、と思っております。

それでは次に、日本は現在先進諸国をリードする高齢化社会ということで、65歳以上の人口が最も最近の発表で、日本の総人口の26.7%と言われていますが、高齢化社会に向けて、ペットと暮らす意義や効用についてどのようにお考えになっているかお伺いしたいと思います。

於保先生、いかがでしょうか。

於保:

私どもは保護団体ですので、様々なご相談を受けることがあります。特に最近では高齢の飼い主さんや高齢の方ご家族に持つ方からのご相談がとて増えています。実際の事例をご紹介したいと思います。例えば、福島県に住んでいる70代の高齢のご夫婦の例で、ご主人は今もお元気でいらっしゃるんですが、奥様が恐らく脳梗塞などの後遺症で発語が少し不自由で、お身体も若干不自由です。このご夫婦は犬と猫を両方飼っているんですが、犬の散歩には、奥様は行けないので旦那さんが行ってらっしゃいます。奥様はというと、猫を2頭室内飼いでいるので猫の世話を奥様がしておられます。わんちゃんのご相談があることでお宅にお邪魔させていただいたんですが、奥様が不自由な体をかばいながらもご自分の猫たちのかわいい様子を私達に一生懸命話してくださって、一緒に寝るのよ、とかこういうものを好んで食べるのよ、とか嬉しそうに話してくださるんですね。その様子を見てみると、体も不自由ですし、ご夫婦お二人だけで慎ましく暮らしていらっしゃる様子ではありましたが、動物がいるということでこの夫婦は楽しく暮らしているんだ、ということがひしひしと伝わってきました。もうお一方は、こちらも福島県にお住まいの75歳の一人暮らしの女性です。旦那様が随分前に亡くなっておられますが、40年間、犬や猫とずっと暮らしてきた方で筋金入りの飼い主さんです。その方は6年前ほど前から、子犬の頃から飼っている秋田犬と柴犬のミックスのわりと大きな犬を飼っていらっしゃるんですが、だんだんと年老いてきて散歩に長く行けなくなってきてしまったんですね。ただ、犬は中型犬なのである程度の運動量が必要。可哀想に思って玄関先の広場に、リードを繋いでおくと滑車で走れるようなものを作ったりと工夫されてはいたんですが、やっぱりわんちゃんにとっては少しストレスが溜まってきてしまっていたようで、散歩の途中でリードが外れてしまった時に、他のわんちゃんのところへ走って行って噛んでしまった、という事故が起こってしまったんですね。その事故で飼い主さんがすごく悩まれて、ご近所の目もあるし、リードを離してしまった自分を責めるような気持ちもあって、どうしたらいいかと保健所にも相談に行かれたそうです。そこで「処分した方がいいのではないかと相談したけれども、保健所の方からは「飼い方をしっかりしていれば大丈夫ですよ」と帰されてしまったそうです。でもご本人としては、やはり飼い方に悩まれていて、私たちのところにご相談にきました。お話を伺っていくと、今までしていたような長い時間の散歩は難しいし、散歩の途中で引っ張られてしまうと転ぶかもしれないので怖いし、できれば他の方にお預けできると嬉しい、と仰っていたので、私たちの方でわんちゃんはお預かりしまし

た。ただ、40年ずっと動物と暮らしてきた方が突然そこで一人になってしまうと、それは絶対に寂しさを感じますし、もしかしらひきこもったり、認知症になってしまったり、ということもあるかもしれないな、と思って、「差し支えなければ、私たちの団体にいるもっと小さな飼いやすい犬を預かって頂けませんか？」とご提案したところ「是非」と仰ってください、今はそのわんちゃんを迎えるために、楽しそうにご準備をされています。そんなことから、高齢者の方、特に一人暮らしの方が動物と暮らす、というのはとても大事なことだと思います。愛護団体も、60代以上の方には終生飼育が難しいからと、動物を渡しませんけれども、なんらかの飼育支援の手を差し伸べていくことで、動物と健康に暮らしていく期間がより長くできれば、我々の活動も捨てたものではないかな、と思います。私たちが今、高齢化とペットのことを考えていく上では、そういった点で支援をしていければと思っておりますので、高齢化社会についてはそのように考えております。

越村：

ありがとうございます。今、ご夫婦のお話もありましたけれども、ご夫婦でペットと暮らしていると、夫婦間での会話が50%増えたり、夫婦げんかが4割減った、というデータもあります。皆さまにお配りした、「笑顔あふれるペットとの幸せな暮らし」の小冊子にも、そういった様々な効用が載っておりますので、またご覧頂ければと思います。

たしかに今、一人暮らしの高齢者のお話も出ましたが、今男性は12%、女性は21%になってきておまして、これからどんどん一人暮らしの高齢者が増える、という状況です。先ほど申し上げましたように、高齢化率は現在、26.7%ですが、今後、3割4割になることが予測されています。そんな中で「高齢者がペットと暮らすことはできるだけ避けたほうがいいのか」というご意見をお持ちの方もいらっしゃる、「高齢者だからこそ、ペットと暮らすことでQOL(生活の質)を高めて頂く」という意見もあります。また、もちろんそういった高齢者を支援していく、そういったインフラ整備も日本ではしていかないとはいけません。それぞれの見方によって、いろんなご意見があろうかな、と思います。

山崎先生はどのようにお考えでしょうか。

山崎：

そうですね、ペットとの共生が夫婦間の問題解決に役立っているというのはとても嬉しいことだと思いますが、最近は飼っている方がご高齢でまた、その方の犬や猫も高齢、という例が増えてきています。ご高齢のご夫婦がお二人とも入院してしまうので新しい飼い主を探して欲しい、という相談があります。新しい飼育環境を検討する場合、同じ犬種を何頭か飼っていたり、過去に飼われていた経験がある方などにお渡しをしています。お渡しした先で、飼い主とマッチせず迷子になったり、捨てられたりすることはお互いの不幸になってしまうので慎重に行います。高齢の猫やしつけができていない成犬などは高齢の方のご家庭に向いている場合があるなど、いろいろなマッチングが考えられます。新しいご家庭での飼育のお手伝いに、ヤマザキ学園の卒業生や在籍生が行くこともあるんですよ。ご高齢の方が飼育される場合には、ご飯をあげたり散歩のお世話や、グルーミングをしたり、訪問看護・介護に伺うケースも増えてきています。先日、高齢者の方が13歳の高齢のヨークシャーを引き取ってくださったんですが、3ヶ月で亡くなってしまいました。それがやっぱりショックだった、ということで、その後は5~6歳の猫を飼うことにされました。でもその方が今入院されていて、ご家族がその猫の面倒を見ています。それでもやはり動物を飼っていたい、と考えていらっしゃる。一人暮らしの場合だと、また随分話が違ってくると思いますが、色々な形のサポートがあれば飼えるのではないかと思います。個人的な話ですが、私の母が今年の8月に92歳になりました。6月に転んで入院したんですが、我が家の高齢犬たちのことが心配で、早く退院しなきゃと言って、犬たちにおやつをあげるのを楽しみにリハビリを頑張っていました。私が今日のような祭日に外に出掛けても、わんちゃん2頭が母と自宅にいますので、安心してるところがあります。高齢の方たちがイヌだけではなく、人ともネコとも近所の方ともコミュニケーションをとって、一人で生きていくのではなく、他の人達と一緒に生きていくということが大切なのではないのでしょうか。そのほうが医療費などもかからなくなるという統計も出てきています。一人で暮らしている方でも、動物と暮らしていけるような社会が望ましいですね。太田先生はその点についての専門でいらっしゃいますし、柴内先生はイヌやネコが高齢化してきている、という現状に触れていらっしゃるの、良い知恵をお持ちだと思います。一人で暮らし一人で死んでいく…他の命と一緒に生きていかなければ、人間は一人で生きていけないということを、高齢化社会と言われる日本において、みんなが考えていかなければいけないことだと思います。

越村:

ありがとうございます。山崎先生から医療費についての話もありましたが、日本の医療費が毎年1兆円ずつ増えて、今40兆円になっています。ちょっと古いデータでは、ペットと暮らすことで、ドイツでは7500億円、オーストラリアでは3000億円の医療費削減効果があったということで、私どもも、政府にペットとの暮らしについて考えて頂けたら日本の医療費の削減に繋がる、と思っている次第です。

こういった問題についてもご専門でいらっしゃるお二人の先生にお伺いしてまいりたいと思います。

太田先生、いかがでしょうか。

太田:

一人暮らしというのは必然的に増えていきますし、もう一つ、ひとり暮らしになる大きな問題点は、映画の中にもありました、認知症の問題です。そのいずれも、放っておくと増えていってしまう。それをなんとか防ぐにはどうすればいいかという、この映画の中でも一部ありましたが、やはり動物を飼うことが一番安上がりだし、一番効果がある。日本ではそういったデータは少ないんですが、諸外国ではそのようなデータがたくさんあります。そういった意味では、お年寄りこそ、動物を飼うべきであると思います。犬が難しければ、猫。それを実際に進めていかないと、医療費が増え、一人暮らしが増え、また認知症の方が増える、と、どうしようもなくなってしまって、言うなれば破滅をイタズラに待つ、ということになってしまいます。そういった意味では、積極的に進めないといけない時期に来ているのかな、と思います。いずれにしても、動物たちがもたらす効果は十分に分かっているわけではありませんが、いろんなポジティブな面がたくさんあります。単にお年寄りだけでなく、映画の中では子どもたちも出てきていましたが、動物は人の心理を読むのが上手で、この人たちが何を考えているのかがわかるので、映画の中に出てきたような、悩んでいる子供たちにも大変助けになる場合があります。いろんな人口層に対して明らかにメリットがあるので、日本で今現在一番問題となっている高齢者の問題について解決を促すにあたり、かなり有力な方法であると考えています。そういった意味でも、それを現実に進めていかななくてははいけない。私も大学にいていろんなものを見てきましたし、いろんなものを社会に発信してきましたが、実際にそれを応用したことがないんですね。これからは単に机の上で使うだけではなく、応用する時期に来ていると、そういうふうに思います。

越村:

ありがとうございます。後ほど先生にはオキシトシンの話もお伺いできたらな、と思います。

柴内先生はどんなふうにお考えでしょうか。

柴内:

お年寄りの問題は日本が抱えている本当に大きな問題で、このままでいきますとお年寄りの医療費を、若い人たちが支えていけない状況になる。そのことで世界各国でも、動物との生活でその状況を少しでも削減することができるということが実証されつつあるということです。もしお年寄りが一人で暮らしている場合に、お二人でもそうですが、「朝、起きたくない。」「もう今日は朝起きなくていい。」と思ってしまうと、そのまま朝食を食べることなく、起きることもなく、どんどんと体力が失われてしまうわけです。ご経験のある方もいらっしゃると思いますが、私もそうですけれども、犬と猫は目覚ましが鳴ると一斉に起こしにきます。お食事をあげるまで起こされ続けますから、こんな素晴らしい目覚ましはありませんし、起きれば声も出しますし、体も動かします。そして、楽しいですよ。こんな風にお年寄りを規則正しい生活に導くこと、それだけを考えても、動物たちは本当にたくさんの働きをしてくれます。ただ、臨床の場におりますと、お年寄り動物をいっしょに住ませてあげることは、ある年齢より上のお年寄りは、時間に余裕がある、心にも余裕がある、中には経済的に余裕のある方もいらっしゃる、そういう方と一緒に動物が住めれば、動物も幸せだと、考えますね。しかし、気をつけなくてははいけないことは、目が見えなくなり、耳が遠くなり、そしてお年寄りが「今朝食事をあげただろうか」と気が付かなくなったら、これは大変ですね。体に汚れがついていても気が付かないとか、こういうことで動物を不幸にするわけにはいきません。それで私は以前から、動物を模範的に飼っていらっしゃる若いカップルが、動物と暮らしているお年寄りに声をかけて「お宅のチビちゃん元気？」と声をかけることで、お年寄りの健康を見ていく、ということを社会的に確立していくことがとても大事ではないか、と思います。それから、太田先生をはじめ、たくさんの方の研究結果を出してくださっているデータ

を、厚生省にもお願いをして、世界のデータと共に、日本の医療の中でも動物との生活を活かしていくというを取り上げていただかなくてはいけない、ということ。それによって、人と暮らす動物も幸せになっていこうと考えています。また、高齢者の方が、「最後の家族」としている動物と別れなければ施設に入れない、だから施設には入らない」として、またどんどんと体力を落とし、孤独死していく。私の病院でもつい最近、飼い主の方が亡くなってチワワが3頭保護されて、警察からどうしたらいいだろうと相談を受け、すぐに預かることにしました。4.5 日のうちに北海道の弟さんが出てこられてお引き取り下さったんですが、そのように、孤独死の中に動物が巻き込まれている例がたくさんあります。今、高齢者向けの建物を作ってもらっしやる会社と共同で、建物の一部、何部屋かを動物と一緒に住める高齢者マンションを作ろう、と活動をスタートさせています。来年の8月頃には完成する予定ですが、これが良い形で進めば、どんどん増やしたいと思っています。が、ここにもまた問題があります。高齢者のための住まいですから、高齢者のためのケアはついてきます。でも、そこにいる動物たちのことを放つたらかしでは困ります。なので、近くにある、獣医科大学や動物の看護学校の学生さんたちが、その高齢者マンションに出向いて、日頃のケアをお手伝いする。学校も学生さんたちのボランティア精神を活用してもらおう。大学の方としても、願ってもいないことだご協力して下さることになりました。そういった産学共同の体制をとって、お年寄り方を支えていく、その中で、動物がどんなに大切であるかをわかっていただく方法をとっていかないといけないと考えています。私の病院では、3年ほど前から「70歳からパピーとキトンと挑戦」というプログラムを出しました。70歳から子犬や子猫と生活して大丈夫？とお叱りを受けるかもしれません。でも、例えば女性の方であれば、平均寿命が86歳です。そうすると、70歳から子犬と暮らしたとすると、16歳まで子犬の面倒が見られたら、いいですね。もちろんその間にご病気になったり、世話ができなくなったりすることもあると思います。そのような時、動物病院での受け入れも大切です。私の病院でレスキューした4歳の子と暮らし始めた方もいます。つい最近も、4歳すぎたスピッツが高齢者の方のご夫婦にもらわれていきました。ご主人は言葉が少しうまく出ないけれども、体はしっかりしていらっしやる。でも発語を促したい、とそのスピッツを迎えてくれました。レスキューしてから1年ほど、私の病院で綺麗なかわいい女の子に育てました。その子がそのお宅にもらわれてから1週間後、私がお自宅にお尋ねしました。ご主人に「かわいいですか？」と伺いましたら、最初にお会いしたときはすぐにお部屋を出て行かれたのに、その時は「かわいいですよ」とにこにこ顔でお答えくださったので、もう万々歳ですね。奥様はまだお元気なので、きっとこの先十年、十何年と一緒に暮らしていき、その中でご主人が少しでも言葉を回復して下さったら嬉しく思います。そんな風に、動物たちはまだまだ役に立ちます。「70歳からパピーとキトンと」はどなたにもあてはまることでは決してございません。それは病院という体制で、75歳を過ぎられた方の場合、1ヶ月に2~3回ご連絡を取ります。そして、動物たちも元気かどうかを、動物看護師さんが尋ねるといったことを実施していくことによって、社会の中でお役に立てると思っています。そういったことによって、不幸な子たちがまた、幸せになります。そのような場面をこれからどんどん展開していく必要があります。CAPP活動動物を連れての訪問活動でも、お年寄りの方々が、いつもは笑わない方があんなに心を開いて笑ってくださる、そして、元気になられてそれをきっかけに、ご自分でスプーンを使ってご飯を召し上がる様になった方もいます。そうした(高齢者向けの)施設の中でも動物たちの訪問を待ってもらっしやるのです。しかし、動物を不幸にしないということを、常に考えながらその力を生かしてまいりたいと願っています。みなさんもチャンスがありましたら、応援をして頂けたらと思います。

越村

ありがとうございます。今孤独死の話もありましたが、東京都区内では(孤独死が)3000人を超える数字になってきていると思いますし、近い将来1万人を超えるというふうに言われております。そんな中で、タイガープレイスという、高齢者がペットと暮らして、どちらかが先に亡くなっても最後まで面倒を見てくれるという大変素晴らしい施設がアメリカにあります。このような施設が日本にもできると、高齢者が安心してペットと暮らせる、そんな社会が作れるのではないかと考えております。私も「人とペットの幸せ創造協会」で住宅産業や特養ホームの業界のリーダーの方々には是非タイガープレイスを見ていただこうと活動しております。先ほど柴内先生からも、こういった建物がたくさんできたら良いとおっしゃっていましたが、このような施設を早く造り、高齢者がペットと暮らすことで、健康寿命延伸にもつながると思っています。

お時間が迫ってきておりますが、最後に、ペットと暮らすと人生がどのように面白く、そして楽しくなるのか。あるいは人とペットの理想の関係についてはどんなふうにお考えになれるのか、お伺いしてまいりたいと思います。

では、於保先生、いかがでしょうか。

於保

そうですね、私はすごく出張が多くて、ずっとペットを飼えない生活が長かったんですが、2年前に団体を立ち上げて、今は留守番してくれるスタッフがいるので、ようやく念願の猫を飼うことができるようになりました。今2頭飼っていて、月のうち週末くらいしか一緒にいられないんですが、真夜中に帰ってくると「おかえり、おかえり」と盛大に迎えてくれて、私がへとへとになっているのをすごく癒やしてくれるんです。ものすごくわがままに育ててちょっと分離不安気味だったりしますが、一身に愛情を求めて必死になってこちらに向かってくるのを見ていると、なんて愛おしくて、これほどまでに頼ってくれるのであれば、精一杯、私も幸せにしてあげなきゃいけないな、と思ったりします。一方的に癒やしや幸せをペットからもらうだけではなくて、精一杯の幸せを返してあげてお互い幸せに暮らしていければ、人と動物の暮らしというのはより素晴らしくなっていくのかな、と思います。そんな風に自分はありたいですし、そんな世の中になっていけばいいな、と思います。

越村：

ありがとうございました。

大変素晴らしいお考えだな、と私も拝聴しておりました。

それでは、山崎先生はどんなふうにお考えでしょうか。

山崎：

私は生まれてから記憶にあるだけで、生活の中に動物がいなかったということがないので、もしイヌやネコが、あるいは鳥や金魚がいなかったらどうだっただろう、と想像しかできないんですけれども、とても寂しい人生になってしまうと思います。最初にお話しましたように、人間は一人では生きていけないし、自然の中で、他の命と生きていくことが幸せなんだと、私は思っています。「ジェロントロジー」という学問があり、日本語では「老年学」と訳すことが多いんですが、これは老人についての学問ではなく、生まれてから亡くなるまでの命のことを学ぶ学問です。それだけではなく、ジェロントロジーと併せてドッグウォーキングという授業も大学では2年前から始めています。「犬と散歩をする」ことが人とイヌにとってどんな健康効果があるかということの研究をしています。人の生き方が「人生」であれば、犬には犬の「犬生」、猫には猫の「猫生」があるのかもしれないですけども、共に人生を歩み、命を生きていくことが、人間にとって一番幸せなことだと思います。また、今いるイヌやネコは突然日本で発生したものではなくて、ネコなどは中国からきたわけですよ。教典などを嚙ってしまうネズミを退治するためにネコを中国から連れて来まして、エジプトでは3000年くらい前からネコは神さまと言われていました。またイヌも、プードルなどは特に戦後、徴用でみんないなくなってしまった時に、船などで人間が連れてきました。一頭で泳いできたイヌやネコはいないわけですから、そういう動物たちと人が一緒に生きていくことがまず、平和な日本では当たり前のことであり、自然なことだと思います。戦争のあるところではイヌやネコのことを心配してられないですよ。あるいは高齢者が一人で住むことは考えられないわけですから、平和な日本にいる私達は、動物や自然との共生や、それがもたらす効果や幸せについて、世界に発信していかなければいけない。それが今私たちにできることであり、幸せで平和な日本でできることじゃないかと思います。ですから、イヌやネコのいない生活が、私には考えられませんし、それが真の幸せなのかな、というふうに考えています。

越村：

ありがとうございます。犬との散歩という話がありましたが、実はペットフード協会でも調査をしたら、犬を連れて散歩する男性は、健康寿命が0.44歳延びるという結果が出ています。女性の場合には、なんと2.79歳も延びるということで、家で旦那と一緒にいるよりは、外にわんちゃんを連れて歩いたほうが健康寿命が長くなると判断していいような興味深いデータができました。女性の場合は関節に炎症が起こる高齢者が非常に多いので、そういう意味ではお若い時からわんちゃんと一緒に散歩をされるといい、というのはお医者様も言っておられました。

太田先生はどのようにお考えでしょうか。

太田：

先ほど少しか越村さんが、「オキシトシン」についてお話されましたけれども、(あの物質は)特別なことをすると出るわけではな

くて、心の底から嬉しい、楽しいと感じると出るときに出ているんですね。そういった意味では犬や猫を飼っていると、おそらく、笑いが耐えない、とか、楽しいと感じることが多いんだと思います。実際に、私は子供が3人いて、長男とは“とても仲がない”と言うほどではないですけど(笑)、彼が柴犬と、雑種の猫を最近飼い始めたんです。それから、親子の間に笑いが多くなって非常に家族らしくなっています。そういった意味で人の繋ぎにもなるんだということを実感しています。私自身は獣医ですのでずっと動物と身近に暮らしてきたこともあり、そういったことを経験しています。

越村

太田先生の研究で、猫の毛をなでている方が、わんちゃんをなでているよりも、オキシトシンの分泌が高くであるというのを拝聴したことがあるんですが。

太田:

要するに、猫を撫でるときというのは、猫の方も幸せなんですよ。言うなれば、動物も幸せを感じていないとオキシトシンの分泌がうまくいかないの、そういったことの結果だと思います。

越村:

実はペットフード協会が「生活に最も喜びを与えるものは何ですか」とアンケートをとったところ、猫と暮らしている方は、家族よりも1番に猫ちゃん、と出るんですね。それから2番が家族、3番が趣味、という結果が出ています。わんちゃんの場合には、1番が家族、2番がペット(犬)というような大変面白い結果も出ております。

最後に、柴内先生お伺いしたいと思います。

柴内:

今もお話がありましたけれども、猫は大変気ままな動物です。この映画の中でも、何軒かのお宅に顔を出して、良い環境があればそこに住み着く。地球上の位置を大事にする動物なので、命令を聞いてほめてもらえるのを待っているというよりは、良い環境を選ぶことが一番うれしいのです。ですから例えば何年か一緒に暮らしていたとしても、その子が寝ているところに上からなにかがドーンと落ちてきたりしたら、「もうここは嫌だ」と出て行ってしまふこともある。新しい子猫がきて家中を傍若無人に走り回ると先輩が家出してしまう、こんなこともあるのです。そればかりではありませんが、往々にして犬と違う特性はそういうところにあります。今日のご飯を食べない、と思うとお隣でご飯をもらっていたりとか、いいひなたぼっここの場所をもらっていたりとか、猫のそういう気ままなところが大好きな方がたくさんいらっしゃいます。動物と暮らしていて何が良いかという、太田先生の研究報告などと行政にも反映していただき、もっともっと、人も動物も幸せに生きていける社会を作っていくかなくてはならないと思います。そして私は毎日たくさんの動物たちと、たくさんの飼い主さんとお話してお会いして、その結果を見ています。動物たちは飼い主を選ぶことができません。ご高齢の方でも、貧しくて、大きな声を出すお父さんでも、その人が一番いいのです。どこか他のうちの子になったほうがいいなんて、夢にも思わない。それほど愛おしい関係になるんですね。それはそれぞれの間で培われた絆で、誰も犯すことができないものだと思います。「動物を飼ってもいいけど、死んだ時が嫌だから」とか、「あんまり可哀想だから一緒に住みたくない」という方もいらっしゃいます。患者さんを拝見していると、診察していただくとお顔を見ると、飼い主さんとよく似ているんですね、みんな。どこが似ているかわからないんですけど、雰囲気似てらっしゃる。動物との別れをみなさんはとても辛く思われます。もちろん飼い主の方にとっては、子供を失ったことになる。子供を失うこと一番の悲しみです。また、お留守番しているときにどこかでコトコトと音がすると「ワンワンワンワン」と鳴いて玄関まで行って、何事もなかったように戻ってくる、そうするとどこかホッとすることもありますね。心のどこかで、一緒に生活する犬たちに頼っています。まるで親のような存在でもあります。(ペットを亡くすと)親と子を同時に亡くすという辛さがあります。人と比べると、4分の1か5分の1しかない命をもらっているわけですから、必ず、私が見送ってあげますよ、というのが、飼い主にとっての幸せでなくてはいけません。飼い主さんに見送ってもらえる子は一番幸せだと思います。私はたくさんの別れと同席することが多いです。親と子を同時に亡くすということも辛いことです。しかし、どんなときに(ペットが)一番喜んでいたのか、考えてみてください。例えば診察台でガンの診断をしても、その時痛くなければわんちゃんや猫ちゃんは絶対に落ち込んだりしないのです。飼い主さんと私は落ち込みますけれど、どのよ

うな診断が出て、今痛くなければ動物たちはハッピーなんです。そういう子たちに対して、できることをしてあげ、見送ってあげることが飼い主にとっての責任だと思います。見送ってもらえたら一番幸せです。皆さん考えてみてください。わんちゃん猫ちゃんたちが元気なとき、一番幸せなのはいつでしょう？ 一家団欒で、お父さんはテレビを観て、お母さんは新聞、お兄さんも寝そべてゲームをやっている、そんな時に一緒にひっくり返っているわんちゃん猫ちゃんが一番幸せじゃありませんか。おうちの方々がにこにこしている時が一番うれしいのです。お別れしてしばらくしたら、その時のことを思い出して、元気になっていただきたいと思います。そしてできることならば、その経験を活かして、もう一つの命を預かっていただきたいと思います。経験のある方のところにいけたら、その動物はハッピーです。前のペットへの恩返しは、新しい命を預かってあげることが一番だと思います。人は代わりがないと、なかなか補えない動物ですけれども、そういう補い方だったらきっと価値があると思いますので、多くの方にそのことを伝えていただきたいな、と思います。これは、きっと動物たちが長く過ごしている間に、私に伝えてくれたメッセージではないかな、と思っております。私も落ち込みますけど、頑張ってみます。

越村：

大変素晴らしいお話をありがとうございました。

私はこの業界におりまして、このペット産業はある意味、健康産業であり、教育産業、平和産業、また幸せ創造産業かな、と思っております。今日は著名なパネリストの先生方4人の皆さまに大変貴重なお話を頂戴しました。この映画「先生と迷い猫」の映画の公開によってペットと暮らす方々が増え、素晴らしく、優しい社会づくりに貢献できたらと期待しています。できる限り多くの皆様にこの素晴らしい映画をご覧いただきたいと思います。

今日は大変短い時間でしたが、パネリストの先生方、大変素晴らしいお話を頂きましてありがとうございました。